

---

# 名探偵- 宿命

xxx亞柚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名探偵 - 宿命

### 【Nコード】

N9615F

### 【作者名】

xxxx亜柚

### 【あらすじ】

毒薬APTXX4869を飲まされた東の名探偵工藤新一こと江戸川コナンの宿命！！黒の組織との決戦がついに始まる

## プロローグ

「あゝあゝ暇だゝ」  
外は雨。

阿笠博士の家で

大の字に寝っ転びながら言った。

彼は江戸川コナン。

小学生の姿をしているが、実は

東の高校生探偵

工藤新一なのだ。

蘭と行ったトロピカルランドの

日を境に高校生から小学生へと体が縮んでしまった。

全ては黒を身に纏った奴らから始まった。

「新一、

新しいゲームができたんぢや。やらんか？」

新一の正体を

知っている唯一の人。

他にも

西の名探偵と言われる

服部平次。

A P T X 4 8 6 9 を開発し

組織から逃げ出す時に

それを飲んで俺と同じ様に

体が幼児化になった

灰原哀。

組織ではシェリーと呼ばれ  
本名は宮野志帆と言う。

工藤新一の両親、

有名小説作家工藤有作、

優紀子も知っている。

本堂英輔も唯一のひとり。

「暇だしやるか。」

コナンは起き上がり  
ゲームをやりだした。

ピコピコ・・・

「よっ・・・よっ・・・よあゝ」

テレビには

“GAME OVER”と書かれていた。

頭が切れるがゲームと歌になるとダメダメになる。

「どーじゃ？このゲームは傑作なんじゃが・・・」

「なかなかいいんじゃないか?!意外とこれはまる。」

ピコピコ・・・

コナンはまたやり始めた。

「そうじゃろ！」

自慢げにそして得意げに言った。博士は自分で天才化学者と思っ  
ている・・・。ピコピコピコ

ピコピコピコピコ

「あら・・・」

朝からひまな探偵さんね。」  
と欠伸をしながら灰原がいった。

「おめー・・・朝からそれかよ。」

起きんの遅いしもう昼だぜ？」

時計は11時を回っていた。

「仕方ないでしょ？私夜行性だもん。」

ははは・・・

苦笑いをするコナン。

「それより江戸川くん。話があるの。ちょっと来てくれる？」  
哀は真剣な顔で言った。

「実は・・・」

## 第1話：始まる

・コナン目で書きます・

「実は……」

あなたの本当の家から組織の仲間が出てきたの。「  
俺はびつくりした。」

それもそうだ。

本当の家から組織仲間が出てきたと言っただから。

「……奴らの仲間が……」

「ええ、そうよ。」

もしかするともう正体も居場所もばれてるかもね。」

灰原は笑みを浮かべた。

「おい、灰原！おまえ……逃げる気か？」

「ふっ。私は逃げない。戦っわ。」と静かに言った。

今までで

一番最高最大の

戦いが始まるうとしている

「博士にはこのこと言うのか？」

「言うわけないでしょ。言ったら殺されるかもしれないのよ？分かるてるの？」

強い かつ 冷静な口調で言った。

「わあってるって。だけど二人でどうしろっていうんだ。」

俺は蘭のことを考えた。

（俺がもしものことがあったら……。）

「あら・・・あなたらしくないわね。いつもならかかってこいって感じなのに。」

（いつもなら・・・か。）

蘭に危害が加わるかもしれない。おっちゃんにも。（

そんなとき

ブーブーブー

携帯が鳴った。

ポケットからコナン携帯と新一携帯を取りだし

「えつ」と、この音はコナン携帯か。」

「あなたも大変ね。」

と灰原に言われ、キッチンへと向かっていた。

俺は苦笑いしたあと

電話に出た。

「もしもし、蘭ねえちゃん？」

子供らしい声でしゃべた。

「もしもし、じゃないわよ。今どこにいるの？今日1時に出かけるって言ってたでしょ？」

（　　）

もうそんな時間・・・それにすっかり忘れてた。（

「ご、ごめんなさい。蘭ねえちゃん。」

「まったく。気を付けて帰ってくるのよ。」

「はあ〜い。」

ブーブーブー・・・

電話を切った。

はあ〜

さて帰るか。

「この話はまた後でな」  
と灰原に残して  
今住む毛利探偵事務所に  
帰っていった。

一方・-

「兄貴、裏切りもの見つかりましたかい？」  
今しゃべたのはウオッカ。

「ふっ。いづれ分かるさ。裏切りもの……シエリー。」  
不気味な笑みを浮かべ煙草を吸った。  
こいつはジン。

「あの方が直々に調べてるらしい……あと面白いことが分かった。」

「  
と言いつい何かを企んでいる表情をし、車を走らせた。

カラスのように  
真つ黒のポルシェ356Aを、

工藤新一 Ⅱ 江戸川コナン

VS

黒の組織

との決戦の  
幕が開かれた!!





## 第2話：迷い

(さみ〜。雨早く止めよ。)

コナンは毛利探偵事務所に急ぎながら歩いた。

ざーざー。

蘭はタオルを持ちながら

やむ気配が無い雨を窓越しで

眺めながらコナンの帰りを待っていた。

がちや・・

「ただいま〜」

陽気な声で言った。

蘭は

「おかえり。

寒かったでしょ？このタオルで拭いてて。着替持つてくるから。」

と言つて着替えを取りに行った。

(なんか母親みてーだな。)

と感じながら

髪や濡れている肌を拭きはじめる。

「コナン君、はい。これでいいよね？さあ着替えなきゃ風邪引いちやう。」

「うん！」

「コナン君朝から博士ん家行ってあたしの話忘れちゃうんだから。時計を見ると1時を回っていた。」

「ごめんなさい、蘭ねえちゃん。時間過ぎちゃってるね。」

「もついいのよ。さあ今から出かけるわよ。準備して」

とそんな話をしている間に

着替えが済んでいた。

「蘭ねえちゃん。

今日どこ行くの?」

と尋ねた。

「忘れちゃったの?」

今日はね、お母さんと外出するのよ」

(あっそうだった。昨日そんな事言ってたな。)

「おじさんは?」

「先に行ってるわよ。」

省略させていただきます。

・毛利探偵事務所・  
ブーブーブー

(え〜と新一の携帯方か。って服部!!)

「・・・もしもし」

「もしもし?工藤なんや元気無いけどどなんした?」

「はあ、、でおめーなんの用だ?」

「つれない奴やなー。ま、ええわ。明日そっちに行くからよろしく  
な」

「はあああ?!」

「なんやそんな嬉しいんか」

「・・・その逆だよ」

呆れていると

「コナン君もう寝なさいよ」

(まだこんな時間。蘭のやつ、子供扱いしやがって)  
何て言えねーけど

「はぁーい。蘭ねえちゃんおやすみなさい。」

「おやすみ。」

受話器の向こうから笑い声が聞こえる。

「何笑ってんだよ?」

「おまえ、面白い奴やなー思ってたな。ハハハハW」

「で何の用で来んだよ。」

「まあいろいろやいろいろ。なあ黒ずくめの奴らはどーなってる?」

「.....」

「ん?」

もしも〜し?聞こ

「言わね.....」

「?何があつたかよー分からんけど明日聞いわ。ほなさいなら。」

「ちよつ待(プープープー

電話が切れた。

(自分勝手なやつだな.....)

でもどうしよ。服部に言ったら力になつてくれると思っけど、余計な所まで首突つ込むよな.....。灰原も言ってたけど殺されるかもしれない。それだけは避けたいこと.....だよな.....)

コナンは一人言うかわらないか

悩み更けていた。

悩み悩んで

悩み疲れて寝ていた・・・。

びよ・・・びよびよ

(う・・・ああ・・・俺寝ちまったか)

場所変えて事務所・・・

がちや・・・

「あっおはよ。コナン君」

蘭はエプロンをして笑顔で迎えてくれた。

「蘭ねえちゃん、おはよ。」

「今日ね和葉ちゃんと服部くんがくるんだって。」

(へえ〜彼女もか。)

「そうなんだ。」

「買い物とかいっぱい行こうね」

「うん！！」

がちや・・・

ドアが開いた瞬間から

「じゃますんでー。・・・ぎゅー！！くぐぐぐじゃのーん、コナン、コナン、コナン

君

「久しぶり、平次にいちゃん」

（早く慣れるよな・）

（ほ〜いいのかなそな事言つて。ばらしてもええんやぞ〜）

（な、なるべく早く慣れて下さい汗）

（そやそや、）

「あの二人すごい仲良しやね。」

「本当！なんか兄弟見たいだよね。」

と俺と服部を見ていた。

気付かなかつたけど・・・

「ねえ皆で買い物行かない??」

蘭が提案した。

「ええね それ！！行こうやなあ平次〜」

「ああ〜俺はええや、なあこ、コナン君」

「えっ」

「なあ〜コナン君?!」

（明らかに口調変わってるよな・・・）

「・・・うん」

時変わって・・・

「服部くん頼んだわね。」

「おう！任しとき〜」

「じゃ行ってくるね」

蘭と彼女が出かけていった。

「工藤！！奴らの事教えて〜な」

（いきなり直球かよ・・・）

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なあ工藤！！なんで教えてくれへんの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・俺の事嫌いなんか？」

服部は悲しそうな顔していた。胸が苦しくなった。

（俺はこいつを殺したくない。だけどこんな顔をさせたくなかった。）

「バーロー！！そんなわけない！！だけど・・・」

大声で言った俺に服部が驚いていた。

「だけど・・・なんや？」

恐る恐る聞いてきた、

「だけど・・・おまえを傷付けたくないし本当に危ない事なんだ・・・」

「そんな今始まったことちゃうやろ?!」

「っ」

「なあ、教えろや、」

「・・・もし教えたら余計な所まで首突っ込むだろ？」

「そりゃな・・・探偵の血が騒ぐ？そな感じやなあ。でもおまえもそ  
うやろ？同んなじや、」

服部はそう言っ

外へ出ていった。

（探偵の血が騒ぐ・・・か。俺もそれは同じだ。けどなあ。。。）

### 第3話・決断（前書き）

アニメで似たようなシーンの表現がありますが、軽く流してください。  
い。B Y 亞 柚



### 第3話：決断

服部が外に出ていった。

（なんやねん・・・）

教えてくれたってええのにな）

1人思いながらバイクを走らせた。

場所変えて・

毛利探偵事務所

コナンが1人頭を抱えていた。

（俺だって・・・俺だって！！！！！！

教えてやりたい！！

話してやりたい！！！！！！！！！！）

ただ時間が過ぎていく・・・

・  
「兄貴、

裏切り者見つかりましたかい？」

「ふっ、そう焦るな。ウオツカ」

黒幕のジンとウォツカ

「あの方が直々に調べているらしい。あと面白い事が分かった。」  
ジンがそう言い

不気味な笑みを浮かべた。

「マジですかい？」

それは心強いですねい。」

「ふっ待ってる。」

裏切り者・シエリー！！」

ジンとウォツカは再び怪しい笑みを浮かべシエリーを想った。

同時期・

阿賀博士家の実験室にいた灰原。

ゾクゾクゾク；；ノ

背筋に殺気を感じた。

（この感じ；；まさか・・ねゝゝ）

自分の勘違いだと信じて、

APT X 4 8 6 9 の解毒剤の開発を始めた

ジンとウォツカは灰原の話をしながら

米花ホテルから出てきた。

「そついえば兄貴、

あいつ早い所始末した方が

いいじゃないですかい？」

ウオツカは何か思いついたように  
そう言った。

「なに、そう焦る必要はない。」

と意味有りな感じでジンは言った。

道の向こう側に置いてある

愛車ポルシェに向かって堂々と

車道を歩いた。

プッププー！！！！

トラックのクラクションが

けたたましく鳴った。

「てめえーら！！あつぶねえーだろ！！！！！！」

と運転手が窓から身を乗り出して

怒鳴った。

ジンとウオツカは

そんなのお構いなしに歩いてく。

「聞・てんのかあ！？こらあああ！！」

そんな態度に腹が立って

さらに声を荒げた。

流石に2人は立ち止まった。

冷えた目で殺気をブンブンさせて

運転手を睨んだ。

恐ろしく鋭いその睨みに運転手は

怯んでしまった。

脅えたような顔をして急いで車を出した。

「下らんことをした。」

とジンは言って、2人は歩き出した。

周りの車の視線を集めながら…

そこには交差点を曲がってきた  
服部もいた。  
黒ずくめの奴らだつて事は  
すぐに分かった。

（なんでや？何で  
こんな所にいる??工藤は  
何にも言つてへんかつたぞ!?  
とりあえず言わへんと!!）  
服部は来た道をUターンして  
スピードを上げて急いだ。

場所変えて・  
毛利探偵事務所

（まいったなあ）  
コナンはまだ悩んでいた。

/ノがちゃ!!  
勢い良くドアが開かれた。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・く・・・どう・・・」  
息を切らした服部がいた。

（バイクで出かけたから  
この部屋までのあの階段を  
全力で駆け上がったんだ）  
と思ひながら

「どうしたんだよ?そんなに急いで・・・」  
「ハア・・・水・・・くれへんか・・・」  
俺は水を持ってきて服部に渡した。

彼は水をグビグビ飲んだ。

「で、どうしたんだよ？」

「ふう〜生き返った。・・・ってちゃうわ!!」

あんなさつきな黒ずくめがいたんや!!」

俺は耳を疑った。

んな事有る訳ないだろ・・・

奴らはもうすぐそこまで来てる??

分からない……

たぶん青ざめたひどい顔を  
していたのだろう……

「おい!!工藤!!しっかりせー!!」

(あつ やべ……

俺の脳……思考停止だった……)

「服部、独りにさせてくれないか？」  
と言って部屋を出た。

そのつもりだった……

「ちよつ待てーなあ!!」

まだ話はおわってへんで。」

と俺の手首をかつちり掴んでいた。

「離せよ……服部。」

お前に話せことはない……」

俺の態度の変わりっぷりに驚きつつ

「なあ工藤。」

……

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

長い沈黙が続いた。

沈黙を破ったのは服部だった

「工藤。教えてくな。」

何かを諭すような優しい口調で  
言った。

(こいつは本気で知りたいと思ってる。

俺の事を本気で心配してる。

・・・それだったら・・・)

コナンを1つの決意をした!!!!!!

「・・・実は・・・さあ・・・」  
コナンは話し出した。



## 第4話：驚き

服部平次の目で書きます・

「実は・・・さあ・・・」

工藤が話出した。

正直びつくりしてる。

あれ程口閉ざしていたのに、  
今話出したんだから・・・。

「俺の本当の家から組織の奴らが  
出てきた・・・もう居場所も正体も  
バレてるかもって灰原に言われたんだ。」

工藤は俯きながらそういった。

言葉をかける事が出来なかった。

「もしバレてるとしたら、

蘭もおっちゃんも歩たちも博士も

それにお前も危害が加わるかもしれない・・・それに！！！！もし  
ものが

「そな・・・何言ってるんねん！！

縁起でも悪い事言っくなや！！！！」

思わず俺は怒鳴ってしまった。

（そりゃ怖いかもしれへん・・・

でも弱気な工藤はいや。）

工藤は俺の怒鳴り声で体を

ビクツとさせた。

「・・・俺さあ・・・1人で

戦うつもりだから……」「工藤……」

「どっだけ危険か一番よ・分かつとるんは工藤やる?!俺はそんな認めへんぞ!!」

「危ないことはよく分かつてる。だけどこれは俺の問題だ。俺がどうにかする!」

「あほっ!!俺は一緒に戦うで!!」

工藤が止めても俺も戦う!」

「だめだ!!服部を危ない目には合わせられない!!!!」

「俺はこのまま工藤をほっておけへん!!分かつてくれや……」  
最後の言葉を言い終えた。

工藤は少し考えたような感じで

「……勝手にしろ。」

「だけど無茶はするなよ……」

こう言った。

何も言わず部屋を出ていった。

今度は工藤を止めることは出来なかったが後ろ姿が恐怖に恐れ小さく見えた。

俺はそれを見て

絶対負けたらあかん!!

そう思った。

俺が工藤の力になる事を許した  
のもそうだけど・・・  
黒ずくめの奴らが動き出してる  
そのことにも

驚き・・・だ・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9615f/>

---

名探偵- 宿命

2010年10月15日23時09分発行